


3 花 き

項 目	作 業 内 容
<p>(1) 高温期の栽培管理</p>	<p>(今月の作業のポイント)</p> <ul style="list-style-type: none"> ○高温期の栽培管理 ○ゆり類の高温対策と栽培管理 ○トルコギキョウの高温対策と栽培管理 ○ばらの高温対策と栽培管理 ○シクラメンの高温期の管理 ○台風対策 <p>ア 施設栽培では高温障害を受けやすいので、換気扇を利用した強制換気を実施し、日中の施設内気温の上昇を極力抑える。寒冷紗等による遮光も効果があり、30～50%遮光を目安とする。遮光資材の展張は施設外や開放した施設内の肩から肩への平張りの効果が高く、展張時間は最長10時～16時の間とする。</p> <p>イ 細霧により葉温を低下させる。</p> <p>ウ 高温、乾燥時にはハダニ類、アブラムシ類、アザミウマ類等が多発するおそれがあるので、防除を徹底する。</p> <p>エ 採花は気温の低い早朝に行い、冷蔵庫内で水あげをする。</p>
<p>(2) ゆり類の高温対策と栽培管理</p>	<p>ゆり類は一般に気温が高いほど発芽、開花が早まり、到花日数は短くなるが、花数や葉数、茎長が減少し、切り花品質は低下する。特に、発芽後30cm程度までの温度が高いほど花数は減少する。さらに、発蕾期の高温・乾燥条件は奇形花などの生理障害の発生要因となり、花蕾長6cm頃までは障害を受けやすく、30℃では花飛びが発生しやすい。従って、高温期には換気、遮光等による施設内の昇温防止と適切な水管理を心がける。</p> <p>高温期に植え付ける作型で問題となる葉焼け症は、展葉中の上位葉がしおれ、かすりや褐変症状が見られるため、切り花品質が著しく低下する。高湿度、カルシウム不足で葉焼け症が助長されるといわれている。地温の上昇により、上根の発達が阻害され地上部の生育が進んだ時に多発する。発生には品種間差が大きいですが、発生しやすい品種では大球で多発する傾向にある。</p> <p>対策として、定植後の上根の伸長を促進するために、植付け前の球根を発根適温である8～13℃の冷蔵庫内に2～3週間入れ、芽出しと発根を促進するプレ・ルーティング処理(写真1)</p>

項 目	作 業 内 容	
<p>(3) トルコギキョウの高温対策と栽培管理</p>	<p>を行う。なお、処理中の球根のパッキング資材には、湿らせたピートモスを利用する。</p> <p>定植床は事前に寒冷紗被覆やかん水を行い、地温の低下に努める。なお、生育初期はこまめにかん水し、定植時や花芽分化前後は遮光等により可能な範囲で適温管理(15～25℃)に努める。ただし、過度の遮光は花芽が枯死する原因となるので、遮光率は50%程度までとする。</p>	 <p>写真1 プレ・ルーティング処理後の球根</p>
	<p>トルコギキョウは、育苗期間中に平均気温25℃以上で、かつ夜温20℃以上の温度条件に遭遇すると幼苗がロゼット化する品種が多い。</p> <p>苗のロゼット化回避には、種子を暗黒湿潤状態で10℃・35日間冷蔵処理した後、本葉4枚展開時まで、夜間のみ15℃で管理する夜冷育苗や同時期まで育苗施設内の昼温を25℃、夜温を18～20℃で管理する冷房育苗(写真2)を実施する。</p> <p>定植後、高温状態で管理すると上位葉の葉先が白ないし灰褐色に枯れる「葉先枯れ症」が発生しやすくなるため、施設サイドを開放して十分換気し、必要に応じて遮光率35%程度の寒冷紗を展張する。葉先枯れ症の発生しやすい品種では、定期的にカルシウム剤を散布し、発生の軽減を図る。</p>	 <p>写真2 冷房(クーラー)育苗</p>

項 目	作 業 内 容
<p>(4) ばらの高温対策と栽培管理</p>	<p>ばらの施設栽培では、寡日照後の高温と強日射で葉焼けが起こりやすい。また、花蕾の発達後期に 35℃以上の高温に遭遇するとブルヘッド（奇形花）が多発する。</p> <p>対策としては、換気に努めるとともに、寒冷紗やアルミ蒸着ネット（写真3）等を日中高温時の数時間展張し、室温の低下を図る。また、自走式防除機を活用した細霧も効果的である。なお、高温、乾燥時はハダニ類やアザミウマ類の発生が多くなるため、発生状況を確認し薬剤防除を徹底する。</p>  <p>写真3 アルミ蒸着資材による遮光</p>
<p>(5) シクラメンの高温期の管理</p>	<p>8月下旬までは、窒素濃度を 30 mg/L (ppm) 程度の液肥を4～5日間隔で施用し、葉色に注意しながら生育をやや抑え気味に管理する。ただし、リン酸とカリについては十分に与える必要があるため、含有率の高い置き肥で補い、花芽分化を促進する。生育診断では、土壌から排出される硝酸態窒素濃度は 20～30 mg/L (ppm)、樹液濃度は 25 mg/L (ppm) 程度を目安とする。</p> <p>また、8月は最も高温時期となるため、遮光資材（50～70%遮光）による被覆や換気を十分行い、施設内が 30℃以上とならないよう心がける。遮光による照度不足は葉、葉柄が軟弱になるので、鉢の間隔を広げることで受光面積を確保し、風通しを良くする（基本的には7月の管理と同様）。</p>
<p>(6) 台風対策</p>	<p>8月以降は上陸する台風が多くなると予想されるため、台風情報に注意し以下の対策を講じる。</p> <p>ア 施設の周辺に防風網を設置して、風当たりを弱める。</p> <p>イ 被覆資材の破損箇所を補修するとともに、ハウスバンドを締め直す。</p> <p>ウ パイプハウスは竹材や直管で筋交いを入れ補強する。</p>

(作成 農林水産研究所)